

看護に求められる基礎科学教育

A clinical nursing viewpoint of basic science education

内田 雅子 Masako Uchida, RN, Doctoral candidate

大分県立看護科学大学 専門看護学講座 成人老人看護学 Oita University of Nursing and Health Sciences

2001年4月4日投稿, 2001年6月18日受理

要旨

看護教育において基礎科学教育をよりいっそう充実させることが求められている。しかし臨床看護においては科学と人間性、個性を尊重する看護の調和が課題であり、このような視点から基礎科学教育のあり方を検討する。実習指導及び筆者自身の経験から、クライアントを要素に分けて分析し看護問題を解決するための論理的思考はできても、人間性、個性を尊重した看護を実践することは難しい。従来の科学教育は人間を部分に分けて理解することを目標としていた。このような視点ではクライアントの全体性、個性が排除されやすい。これからの看護の基礎科学教育は、部分の総和以上である個人を総合的に理解する視点を培うことが必要である。そのためには全体的視点、日常的視点を出発点とするより柔軟な科学の視点を前提に、分析的方法と包括的方法を相補的に活用できる能力を育成することが求められる。

Abstract

It is necessary for basic science education to be more complete in nursing education.

However in clinical practice, it is necessary to balance science with nursing that respects humanity and individuality. This clinical nursing viewpoint of basic science education is discussed in this paper. Nursing that respects individuality is more difficult to practice than logical thinking that analyzes client's elements in order to resolve nursing problems. The goal of scientific education until now has been to understand the parts of human beings. Therefore, nurses could not understand clients as to their wholeness or in regards to their individuality. In future, basic science education in nursing needs to develop a synthetic view of the individual that accounts for more than the total sum of the parts. Accordingly, basic science education needs to develop the student's ability to use practically and complementally both analytic and synthesizing methods on the premise that a flexible viewpoint originates from holism and daily life(or phenomenological life-world).

キーワード

臨床看護実践、基礎科学教育、分析的、総合的、人間性、個性

Keywords

clinical nursing practice, basic science education, analytic, synthetic, humanity, individuality

1. はじめに

成人老人看護学実習の折、既存の理論・知識やマニュアルに沿ったアセスメントや患者指導は積極的であるのに、クライアントを生活者として理解し援助的な人間関係を築くのが困難な学生が少なくないということに気づかされた。アセスメントの内容をみると実態からかけ離れた健康問題が抽出されていたり、個性を尊重した看護が理解できず標準看護計画から抜け出せない場合もみられた。学生らの事例は稀なことではなく臨床経験者においても問題提起されることがある。筆者自身の臨床経験を振り返っても、クライアントを疾患中心にとらえあたかも情報の集合体かのようにならしていた時期があったように思う。一方クライ

アントやその家族らには、人間性を尊重した医療が受けられなかったと訴える人々が多いのも事実である。こうしたことから臨床看護実践においては、科学と人間性、個性を尊重する視点を調和させることが課題と考えられる。このような視点から基礎科学教育のあり方を検討する。

2. 看護に求められるもの 科学と看護の乖離

看護が職業として成立したのは、19世紀後半、ナイチンゲールの実践を社会が認めたことに始まる。看護はその時代や社会の要請に応えることで職業化されてきたし、これからも社会やクライアントのニードから独立して発展できるものではない。また看護の現象

には必ずクライアントが含まれ、看護者もその現象の一部であることを免れない。したがって看護学は科学者共同体の中だけで自己完結、自己充足する知的営みではないはずである。

ある学会のシンポジウムで癌患者家族の発表に気にかかる発言があった。それは末期癌の母親を介護した娘の立場からの発表で、「手の施しようがないとわかったとき、大学病院の医師の何もすることがないという態度で、外来通院に移行すると血圧さえ測ってくれなかった。」という。そして「ナースの方たちは優しくかったけれど、マニュアル通りの優しさで、心の痛みには無頓着なように思えました。...ナースの皆さんにお願いしたいことは、癌患者を患者としてだけ見ないでほしいということです。患者の病気にだけでなく、患者の内面に關心を抱いて下さい。そして、できることなら、ナースの方にとって自分が意味のある存在だと患者が感じられるようにしてほしいと思います。」という言葉であった。ターミナル期のクライアントが求めているのは延命治療ではなく、患者と医療者の役割を超えた人間的な関わりであり、自分に向き合って自分らしい生き方を支えてくれるケアである。同じ人間としてクライアントに寄り添うという態度がなぜ難しいのか。

20世紀中頃より米国では看護が学問として徐々に認知され始める。そのとき看護が学として確立するために最も力を入れたことは、看護の科学性を追及することであった。当時、医学は科学技術の進歩によって専門分化し、いわゆる分析的医学を極めて科学的医療を推進していた。看護もその流れにのって、看護過程や看護診断などの科学的思考の道具を開発し、登録看護婦(士)はさらに医師の診療科に類似した専門領域をもち、スペシャリストの資格化を行なっている。確かに科学的医療はさまざまな恩恵をもたらした。例えば高度先端技術を駆使した手術や、ペースメーカー・人工透析などの人工臓器によって延命率や生活の質は飛躍的に高まった。

しかし科学的な医療・看護は本来人々の健康と福祉を実現することを目的としながら、実際は“人を診ず臓器を診る”、“人を器官や臓器の集合体としてとらえる”というような科学的人間像をつくりだしてしまった。病いとは人体の部分が単に故障しただけのことではなく、そこには苦悩が伴う。人の生命を操作できる立場にいる医療者が人を自分の所有物のように扱ってしまう態度は、従来の科学的思考では歯止めすることはできないだろう。

普遍性・論理性・客観性(主体と対象の分離)に特徴づけられる近代科学によって看護が見失ったものは何か。そしてそれを取り戻すには、基礎科学教育には何が必要なのか。

われわれには、人を“もの”として扱う近代科学的思考が浸透しきっているのではないだろうか。人の病いに潜在する苦痛は目に見えないものであるし、自分が経験していないことは想像しがたい。しかし看護者は自身の病い体験の有無によらず、病いで苦悩しているその人すべてに関わることが求められている。人は身体的・心理的・社会的・精神的側面の総和以上であり、目に見えないものや客観的に測定できないものを多く含んでいる。したがって看護者は疾患のみをケアするのではなく総合的な人間をケアするのである。そのような総合的な人間を理解しようとするとき、明示的に見て取れる情報を知的に分析する過程では見失われるものがあるのではないか。

中村(1992)によれば、科学の知によって人間を取り巻く現象で無視され排除されたものは、生き生きとした生命現象そのものであり、対象との関係の相互性(相手との交流)であるという。つまり科学の知では人間の個別性、多様性、全体性、主観性、歴史性を十分に表現できないという。科学の知を補うもの、それは、その人固有の世界、事物のもつ意味の多義性、人は身体を有することが自他への知覚や振舞いにどのように影響しているかを問い直すことである。そしてそれを可能にするのは経験と技術が統合されたアートによってであるという。

3. 看護教育のあり方

南(1997)は、看護教育においてアートの部分は個人が経験を通して獲得することが期待され、基礎教育や実習でも理論的な知識を得ることを優先し、アートに関する系統立てた教育方法は考案されなかったことを指摘している。さらに看護にサイエンスとアートという2つの目標をたてることの是非を問い、今や二分法を越えてサイエンスとアートを統合する段階ではないかと提言している。

ところで看護の科学教育を考える際に、看護の目標は何か、看護の目的はいかにあるべきかということが問われなくてはならない。看護学が確立するためには、看護哲学と看護科学という2本の柱が必要だという。看護科学は看護現象のなかで実証可能なものについて探求する科学的な方法を生み出すものであり、看護哲学は看護の目的や理想を設定し看護科学がいかに

あるべきかを吟味する拠り所となるもので、現在のところ人間、健康、環境、看護という4つの中心概念が探求されている(川原・吉田・樋口, 2000)。

それでは南の提言を具体的に看護教育に実現するにはどうすればよいのだろうか。現在看護の科学教育は、自然科学、社会科学などの基礎科学を基盤にして、その応用科学である看護技術論、援助的人間関係論、看護過程などの看護方法論として教育されている。これに対しアートの教育は看護哲学のような明確な科目としては教授されておらず、心理学や哲学のなかで人間存在についての考察を深め、講義や実習のなかで教員が学生に看護とは何かを問うことで教育していると推察される。看護の科学の特徴や限界はアートに照らし合わせることで明らかになり、アートも科学の発達によって熟成されていく。つまり科学とアートはそれぞれを互いの内を含むことで発達するという緊密な相補的關係にあると考えられる。したがって、南の提言を看護教育で実現するためには、基礎科学教育の前提を看護のアートに照らし合わせて検討し、それに沿って教育内容を見直すことがまず必要である。

4. 看護教育における基礎科学教育

先日ある看護学会の講演で、養老孟司氏が従来の科学と看護学を比較して「科学は“イカ”を“するめ”にすることなら、看護は“するめ”を泳ぐ“イカ”にすること」と述べている。そういう意味では、ロボットを作っている科学者も看護に近いということだった。私たち看護者は時間の流れを止めた細胞・組織に関する科学的知識を、生の時間の只中にある人を理解し援助するための知識として応用しているわけである。つまり看護に必要な科学とは、還元主義とは反対の出発点、方向性をもつものでなければならないのである。

村上(1986)は、科学的と分析的を等置とするドグマから脱却し、科学に対してより柔軟な論理構造を組み直すことが必要であるという。分析を目的とするのではなくあくまで手段としてわきまえ、分析的であることを否定せず、全体的な現象把握をする方法を探し、その発想を分析の出発点にするよう提言している。

自然科学の分野でも同じような課題に直面し、新たな見方や考え方が出てきている。DNAの研究に携わっていた中村(1990)は、自然科学であった生物学を生命科学へ、さらに「生命誌」へ移行させた。それには「日常性、思想性、時間、物語性など、本来人間

の知の中に存在するものの中で分科を進めた科学が失ったものを取り戻す」という意味が込められている。そして総合的に自然を理解するためには日常的理解と科学的理解すなわち科学と日常を結び付けなければならず、そのためには日常性から出発することが必要であるという。

したがって、看護における基礎科学教育は全体的視点、日常的視点を出発点とする、より柔軟な科学の視点を前提にすることが求められるといえるだろう。また部分を対象化する分析的方法だけではなく、部分の総和以上である人間の全体性を理解するための包括的方法を相補的に用いる科学へと拡大することが必要である。

5. おわりに

本学は開設時より、基礎科学教育にあたる講座を人間科学という総合科学として位置づけている。これは専門分化した科学から総合科学への移行をめざしており、したがって科学と人間性、個別性を尊重した看護の調和を前提としている。このような総合科学の視点を看護教育全体に生かすためには、看護実践の視点から体系づけた基礎科学教育を継続的に検討していくことが必要である。しかしわが国では看護研究者の基礎科学教育に対する取り組みは始まったばかりであり、どのような方向性で取り組むかという一致した見解もみられない。

これを打開していくには中村(1990)の提言する“サロン”のような開かれた場を設けて基礎科学系と看護系の教員間で、あるいは臨床家やクライアントらと対話し基礎科学系教員へとフィードバックしていくことが必要であろう。また可能なら、基礎科学系教員にクライアントあるいは看護者として看護現象を体験する機会を設けて、看護の科学とアートへの考察を深めてもらうことも対話の過程には必要であろう。

参考文献

川原由佳里・吉田みつ子・樋口康子(2000). 看護の科学を模索する: 複雑系の科学の可能性, 看護研究, 33(2), 89-96.

南裕子監修(1997). 2nd International Nursing Research Conference Annotated Edition. JANS.

村上陽一郎(1986). 近代科学を超えて, 講談社学術文庫.

中村桂子 (1990). 生命誌の扉を開く : 科学に拠って科学を超える, 哲学書房.

中村雄二郎 (1992). 臨床の知とは何か, 岩波新書.

日本がん看護学会 (2001). 第 15 回日本がん看護学会学術集会講演集.

著者連絡先

〒 870-1201
大分県野津原町廻栖野 2944-9
大分県立看護科学大学 成人・老人看護学
内田 雅子
uchida@oita-nhs.ac.jp